



TITLE:

# 京都大学瀬戸臨海実験所振興会水族館月報 No. 27

AUTHOR(S):

---

CITATION:

京都大学瀬戸臨海実験所振興会水族館月報 No. 27. 京都大学瀬戸臨海実験所振興会水族館月報 1954, 27: 41-50

ISSUE DATE:

1954-12-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186852>

RIGHT:

録 事

先月にひきつゞき10月も水族館は多くの来館者でにぎわったが10月ほどのことはなかった。3日の文化の日は有意義な文化事業方面に寄与する意味で恒例の如く、窓口における売上金の全額¥10,160.を白浜町公民館に町民の利用厚生に適した圖書を購入する費用として寄付することにした。それに対し公民館長より感謝状を受けとった。

官舎として終戦後移築された物置/タ坪の復旧工事が今月中に完成した。工事費は水族館入口の門棚の修理と合して約46万円を要した。

水族館構内入口より海岸への出口にも棚を設け、広域の境界を明確にし、観光客に対する注意事項を認めた掲示板もペンキを塗りかえたので、入口がすっきりしたものになった。来春にはこの附近に美しい蔓性植物でも植えて一層美化したいとも考えている。広場の西北隅に半ば利用されないうちに放置されていた古い日除棚と付いたベンチが、番所山植物園の手によつて博物館の西側に移されたので、広場が一層広くなった気がする。盡くまで下まつた京都大学

本會発足以来、監事として2年間にわたり理学部事務長の水野喜久三氏が、10月16日付で大阪外国語大学庶務課長として栄轉された。このため監事は1名欠員となるわけであるが、その後任の決定は次の委員会まで持ち越される。水野氏のこれまでの公私にわたる一方ならぬ<sup>御</sup>盡か<sup>り</sup>に対し、本會として厚くお礼申しあげると共に、今後とも機会ある毎に御後助下さることを御願いする次第です。

# 業 務 概 況

## ◎ 11月の入場者数

区 分	水族館発券数		明光バス発券数		合 計	
	本月分計	果 計	本月分計	果 計	本月分計	果 計
大 人	5674	40936	12262	85882	17936	126826
小 人	323	3833	125	2006	448	5839
団 体	11339	58855			11339	58855
合 計	17336	103626	12387	87888	29723	191514
無料入場者					37	974

## ◎ 11月の収入 (果 計)

観覧券売上金 ..... 514,189 ..... 3,417,619

雑 収 入 ..... 2720 ..... 21,327

10月よりの繰越し ..... 751,339

計 1,268,248

## ◎ 11月の支出

### 一般経費

費 目 別	金 額	果 計	備 考
人件費	50,545	459,111	
光熱費	15,627	80,183	
消耗品費	5,160	36,165	
備品費	4,870	26,130	
修理費	4,040	46,354	
資 料 費	13,750	136,245	
厚生費	1,780	14,570	
借入控料費	—	—	
諸 税 公 課	—	3,651	
雑 費	10,310	14,250	9/0,160 公民館図書費と13
通信運搬費	1,520	12,194	料
研究費	—	20,000	
旅 費	—	600	
合 計	104,662	849,453	

### 水族館改善費

項 目	金 額	果 計	備 考
植物鉢植え	—	91,500	
公園道路整備	—	23,930	
博覧館高床排水工事	—	70,090	
雨戸水漏れ修理	—	4,925	
通用起重機(追加)	1,100	12,539	
雨戸入	—	30,000	
ポンプ井戸整備	—	—	
合 計	1,100	232,984	

## 実験所費

項目別	金額	累計	備考
印刷費	56,000	400,000	
備品費	—	177,200	
設備修理費	459,150	459,600	物置使用
特別費	—	9,720	
合計	509,150	1,047,520	

## 博物館費

項目別	金額	累計	備考
人件費	4,100	34,285	
消耗品費	—	170	
修理費	—	6,330	
備品費	—	23,665	
旅費	460	460	
合計	4,560	63,910	

## 積立金

項目別	金額	引出高	現在高	備考
バスツツ基金	9,100		151,000	
賞金	9,100		107,834	
厚生	1,500		7,552	
災害時予備金	55		632,761.50	貸金及び貸付1000入
会議費積立金	—		20,865	
積立基金	85,700		569,590	
合計	105,455		1,489,402.50	

## 支出合計

一般経費	104,662	849,453
水族館改善費	1,100	232,984
実験所費	509,150	1,047,520
博物館費	4,560	63,910
積立金	105,455	780,547
計	724,927	2,974,414

11月末現在高 543,321

支出累計 2,974,414

## ◎ 前年度との比較

	1953	1954	増減
入場者数	30119	29723	- 396
売上金	487,629	514,189	+ 26,560
支出金	521,328.50	724,927	+ 203,598.50

## 水族館記事

- ◎ 11月2日、かねてより魚類やウミガメの購入あつせんにつき依頼をうけていた王野市水族館より差し廻しの舟が到着、マダコ4匹とキューセン10尾の寄贈をうけた。マダコは今迄No.12の水槽に収容していたが一般の人気者ゆえ混雑の際は観覧客がいつもそこで"停滞するので"後方に余裕のある終い近くのNo.19の水槽に移した。
- ◎ アオリイカが2日に3匹、7日に5匹入り、現在No.26の水槽には6匹が元気に泳いでいる。観覧客にはイカが前後に自由自在に動くさまは、ひどく珍しく感ぜられるものらしい。
- ◎ ノコギリガザミが10月2匹新たに入った。28日前からいた雄は新参者の雄にかまれて死に、26日には別の命が水槽から夜間這い出し、下のコンクリート床に落ちて、殻を割って死亡。猿に柿をぶっつけられて金割られたカニはお伽噺にあるが、之は反対に高い所から落ちて自殺したカニの話。しかし残る4匹は健在。
- ◎ 先月入った珍しいスジベラは約2ヶ月生きていたが26日惜しくも死に、代つてヤマブキベラ(24日)、ルリハタ(24日)、ミギマキ(5日)等の鮮やかな色彩をもつ熱帯性の魚が入った。
- ◎ 12月よりいよいよエビ網のシーズンに入ったので、エビ網にかかつて上がるシラヒゲウニ、ソウリエビ、ゴシキエビ、イシギンチャクを脊負った大形のヤドカリ、フトヤギ等がしばしば入手できるようになった。しかし当地では水温もまた大して下らず、寒のシーズンに入るにはまだ"仲々"あるのは有難い。
- ◎ 中央の流し上におく車上バット(No.23)は、今まで"配水管のコツクから水面に水を落し放してあったために、水のしぶきて、なかの動物が見え難いうらみがあつたが、今度からコツクに長いビニール管をとりつけバットの中まで降したので、水のしぶきも飛ばず、音もしなくなり、水面からの観察が容易になった。この方式は漸次他の水槽にも及ぼしたいと思つている。
- ◎ 外の海亀プール傍に亀用起重機を設置した。従来亀の上げ下ろしには梯子を使い不自由していたので、来夏からは大いに活用されることとなろう。

## 博物館記事

- ◎ 9月 篠賀彌五郎氏のあつせんにより、今夏アラフラ海で採れたウミマツ及び採集時そのまゝの状態のシロチョウガイの標本計25尾の寄贈をうけた。

# 資料

## ◎ 11月の気象

	上旬	中旬	下旬
晴天日数(24)	10	6	8
気温(°C)	<u>15.5-19.0</u> 17.0	<u>13.8-18.8</u> 16.2	<u>15.0-18.0</u> 16.7
水温(°C)	<u>19.0-20.3</u> 19.4	<u>17.8-19.4</u> 18.7	<u>17.8-19.8</u> 18.7
比重	<u>23.5-24.0</u> 23.7	<u>23.8-24.9</u> 24.3	<u>24.5-25.0</u> 24.7

但し { 気温は南水槽室  
水温 } は No 25 水槽 で 10 時に測定  
比重

## 付 録

前号でお知らせしたように、時岡委員と筆者は10月の中旬、別個に南関東地区の著名な各水族館を視察した。時岡委員の詳しい視察報告は各館の内容を彼に入り細に互って記述し、おまけに繪葉書・入場案内図・入場券までも添えた、きわめて克明なものであつて、今後の施設の改善や運営操作上多大の参考となるものと思われる。之は、「水族館資料」オノ号として水族館に備えつけられ、委員其他関係者の自由閲覧に供し得るが、将来も他の水族館等のまとまつた見学をする機会があるならば、視察報告としてこの号の……を作りたいものと考えている。

しかし、之には公開をはばかるような差障る面もあるので、ここには、各水族館を見学して得た教訓を、わが水族館にあてはめてみた時の感想の二三を摘記することにする。委員及関係者各位の御参考になれれば幸である。

1. 時岡委員は千葉縣小湊の東京水産大学水産実習場附屬水族館(1/2)、東京都の上野動物園水族館(1/2)、鎌倉坂の下の私立鎌倉水族館(1/2)、藤沢市片瀬海岸の株式會社江ノ島水族館(1/2)、神奈川県三崎の東京大学臨海実験所附屬水族館(1/2)、静岡縣下田の東京教育大学臨海実験所附屬水族館(1/2)及び静岡縣内浦村の駿豆鐵道経営の三津(ミト)水族館(1/2)を見学した。

視察したこれらの水族館と比較してみると、わが水族館は構造上非常に大きな欠点を持つてゐることが痛感される。第一に各水槽が狭小であるために、見る人に十分な感じを与えない。水槽の数は多いが、各水槽自体の収容能力は少ない。中央の流し場に配置されたバットを側觀式の卓上水槽に改める必要が感ぜられる。

収容する無脊椎動物の多いことは、確にわが水族館の特徴ではあるが、その特徴を誇ることは危険である。広い水槽に数多くの種類の魚を容れるよりも、各種毎に区別して水槽を別にした方がよい。

説明と内容の一致しないのがどこの水族館でも見られたが、管理のゆきととかないためであろう。説明板は面倒ではあるが図入りが見やすい。

わが水族館で“動物と見物人との間のしきりになるべく取拂うようにつとめる”といつていたことは氣體めであつて、なるべくガラス面を傷つけないためにも、水槽の外に手すりをもうける必要がある。

南水槽室が明るすぎることは好ましくない。水槽の垂話は水槽の上縁に扉下で設け、内側から俯視して行なうのが常識である。わが水族館のように見物人側から垂話しているような所はひとつもない。餌の食い残しや、屍体を衆目にさらすことのないように注意したい。これがためには飽食させないと、給餌時間を夕方にする等の注意が必要である。

給水系の条件は確かにわが水族館は非常に悪い。取入口が岸に近くて浅いため砂が流入しやすく、台風時は激浪の危険にさらされ、各水槽室の外壁がなく水槽が外気に曝されていること等々である。

博物館を併設しているわが水族館と異なり、この水族館でも標本を陳列することには大して関心を持っていないようだ。

構内に売店休憩所のたぐいを設けることは、観覧者に対するひとつのサービスであるが、その経営が問題である。

水族館の経営方式は現在通りでよからう。もし大学直轄となった場合は、定食の確保が絶対に必要である。水族館食と実験所食との有機的交流を行なえば、最も能率的とならう。

(以上が時岡季復の所見の要約であるが、文責は筆者にある。)

2. 筆者(内海季復)は藤沢市片瀬の江島水族館(2/2), 鎌倉市坂の下(2/2)の鎌倉水族館(2/2), 神奈川県三崎の東大臨海実験所附属水族館(2/2)及び東京都井頭(2/2)の自然文化園にある水生物館(2/2)を見学した。これらの水族館についての感想は前記の時岡季復の印象記と大同小異であるので省略し、ここには水族館についてふつから考えていることを、わが水族館の生い立ちから始めて述べたいと思う。

わが水族館は大正十一年実験所開設と同時に、その一部の建物、即ち水槽室として発着したものである。建物は57坪あつて、現在の南水槽室にあたり、海側小山にある容量300石の貯水タンクと共に、その敷地建坪共に現在と変りはない。最初の頃は、それが三つに仕切られて、広い水族室と狭い標本陳列室と宿直室とからなっていた。その後、一般に公開するようになってから、三つの仕切りは取り除かれ、北側に現在の中水槽室が床下にあつた水槽の代替として増設され、更にその後(博物館のできる前に)北側に標本陳列室が接ぎ込まれ、種々の改変があらなわれ、戦後は南水槽室の建物の改築が行なわれる等、面積においては116坪と、約2倍になったものの、遺憾ながら各室間に有機的なつながりがなく、水族室そのものの実質的拡張は許されなかった。



当時は、云わば大学直営の時代であつて、実験所だけに割りあてられた予算の範囲内でしか施設の改善内容の充実は望めず、水族館として運営するたつに収容の増加を求むるなど、思いもよらなかつた。従つて水族館の運営はもっぱら実験所収容の片手間の仕事として責任者もなく、微々として振舞なかつた。最初が実験用水槽室として出発したまゝの建物であるから、他の建物と同様に四面をガラス窓でめぐらせた四角い建物であり、その外郭も水族館にふさわしい形に拡張もできず、限られた予算の範囲内での内部施設の模様換えしかできなかつた。従つて建物や水槽も継ぎ足し継ぎ足しに終始して、全体ひとつとして見れば、ひどくまとまりのない現在の姿となつたわけである。

これに反して、前述の各地の水族館は、大学附属のものですら、戦前に完成したものでも、最初から建物及び内部施設が一般客の観覧を目的として本格的に設計されたものである。戦後にできたものは、いう迄もなく、各地の水族館を参考にして斬新な設計によつたものであるから、新しいものほどよく見えるのは当然であらう。ここに彼我水族館の構造上の根本的ちがいが存する。

そこで前述のような、各水槽の貯水タンクの小さいこと、見物人の通路にゆとりのないこと、配水系の不備等のいろいろな欠点が、他の本格的な水族館と比べてみると、やたらに目につくのである。しかし、現状を大変革できないとすれば、こゝとしての特色を生かすように内容を整備し、管理に万全を期するよりほかない。

この特色或は利点といつても、遺憾ながら、それは水族館としての設備からきたものではない。例えば(1) 風光明媚な環境に恵まれ、紆余曲折した海岸に接して存在すること、(2) 附近に生態環境を要した浅海動物が豊富にあつて、而も採集容易なこと、(3) 沖産の水族もわざわざ遠く造仕入に行く必要なく、補給にはさして苦勞しないこと、(4) 年間を通じて海水清澄で、暖かく、熱帯的色彩に富む水族の多いこと、(5) 博物館を併設し、直屬ではないが植物園が隣接し、観覧客は同時に生物学的零團氣を満喫させられること、(6) 実験所員が水族館を通じての社会教育に深い関心をもっていること等であらう。

これらの利点、他の水族館から見れば大きな魅力であらうが、それはあくまでも白浜という土地にあるがためのものである。このうゑに水族館そのものの構造が全面的に改められるならば、いつそうよく

なることはまちがいない。

ともかくも、今まででは経費と建築という面において制約され、姑息な手段によつて、小細工を弄しすぎたのが現在に窺つてゐることを大いに反省しなければならない。小さな改善には一步一步の進展は見られようが、全般としてみるとときには、きわめて陳腐なものにしかたがない。要するに十年、二十年先きを見越しての大計を以て、最善の構想の下に、観覧本位の本格的な水族館の新築を企画するにしくはない。といつても設備の奥において日本一を標榜するほどの必要はなく、localなものであつてよい。そうして南國紀州にあること、研究者を擁する実験所付設の水族館としての特色を十二分に發揮したものであらねばならぬ。そうすることがわが水族館としての将来の在り方であらうと信ずる。

最後に、今回の見学で教えられたものであるが、次のような現在の状態で改革すべき点あることを印象づけられたことを申し添えておく。

1. 水槽の丈を高くすることは游泳活潑な魚類などを多く容れなければ、却つて食相になること。
2. 底棲性の動物には、その形態習性を観察するためには、俯視式の大水槽のほかに、側視式の浅水槽もあつてよいこと。
3. 水族室はなるべく外気から肉鎖して、水槽内部の照明をよくすること。
4. 水槽の世話を裏側よりよくし得るような装置にすること。
5. 水質がいくらよくても、取入口の不完全なこのような所では、濾過池が必要であること。
6. 多数の魚族を入れた大水槽の説明板には図入れて表示することが望ましい。
7. 水族館の案内用パンフレット又は教育上役になつて繪葉書類などを発行すること。

以上、兩名の得た教訓は漸次わが水族館にも生かしてゆきたいと思つてゐる。各委員の御叱正を得れば幸である。(内海 記)

昭和29年12月6日発行

(No.27)

編集兼  
発行人

内 海 富 士 夫

発行所

瀬戸臨海実験所振興會  
和歌山縣、白浜町  
瀬戸臨海実験所内  
(電話・白浜温泉メバ)